

# 会 報

第13号

「今井研卒研究生・有志の会」

2009.9.30

## 目 次

	頁
1. 巻頭文 今井 哲二 先生	2 ~ 3
2. 会報 第12号 にお寄せ戴いた 感想文	4 ~ 5
3. 電算写植システム ( その2 ) ・ ・ S39 卒研究生 小野沢 賢三	6 ~ 12
4. 「 一期一会 」 を振り返って ・ ・ ・ S41 卒研究生 鈴木 威一	13 ~ 23
5. ハードカバー製本への挑戦 ・ ・ ・ S35 卒研究生 坪井 孝光	24 ~ 28
6. 第七回 懇親会 決定事項	29
7. 編集後記	30

## 1. 巻頭文

## 巻頭言

「会」の終焉に向かって …… 生者必滅会者定離 ……

今井 哲二

今年の定例懇親会への「出席」を連絡してこられた会員の方は、坪井さんを別にすれば、鈴木威一さんだけであった。「欠席」と連絡してこられた方の他に、回答期限までに連絡の無かった方々もかなりおられた。いつもなら、坪井さんから回答の催促がいくのであるが、今回は、坪井さんも思うところがあって、それを実行されなかった。私自身は参会者がそれほど少ないのなら、今年、形ばかりの懇親会を行って、この会はそれを以って終わりにしては？と思った。懇親会を隔年開催にすることにより、参会者が多少は増えるのではと思ったが、そうはならなかった。

会報第1号～第7号の7冊を合本して、「会報:第一巻」を完成させた。既刊の会報第8号～第12号の5冊に加えて、本年発行予定の第13号と来年発行させる第14号とを合本すれば、「会報:第一巻」と同じく、7冊から成る合本「会報:第二巻」を纏めることが出来る。それで、今年は極めて少人数ではあっても、「第七回 懇親会」を開催して、会報第13号を発行し、来年の懇親会を以って、一

先ずこの会の懇親会は終わりとする。そして、最後の会報第14号も来年には発行し、会報発行もこれを以って終わりとする。



第七回懇親会 於 NTT通研「華迎」

長年に亘り、幹事としてこの会の推進を担われ、「会報発行」という骨の折れる仕事を継続してこられた坪井さんの考えであった。

この会の運営に当たっては、一心同体のごとく、私と相談しながら事に当たってこられた坪井幹事の考えに私は全面的に同意した。そして、本年7月31日に行われた鈴木威一さんを加えた懇親会においても、上記の事柄を確認した。

平成14年、突如としてこの会の「会員名簿」作成が、倉本敏雄さんの献身的な御努力によって遂行され、短期間の内に奇跡的に名簿が完成した。私から見れば、足掛け11年に亘り計三十余名の「卒研究生」の方々が“一つの大きなグループ”として記憶に残り、この間の研究成果も、連続的な研究進展の歩みとして通研の研究報告書などに残されている。しかし、個々の会員にしてみれば、通研での実質1年にも満たない経験は、その前後のこの会の会員の方々とは殆ど繋がりを持っていない。これらの方々が、「懇親会」を通じ、あるいは「会報」を通じ、数十年以前の記憶を甦らせ、10年に近い間、極めて緩い結びつきであったにせよ、お互いに交わりを持った。それだけで十分この会の存在意義があったのではないか。「この会」は、そうした意味において、そろそろその役割を果たし終え、一先ず終息としても良いのではないか。

そういうことであると思う。“始め”のあるものは“終わり”を迎える。この摂理を素直に受け止め、「この会」は終焉に向かっての残り少ない歩を進めていきたいと思う。

佐藤秀吉君そして新妻英雄君を偲んで頂いた事を含め、会員諸兄からは、この間、心のこもった“お返し”の意思を「会報の場において」種々の文章や写真を介し表明して頂いた。その意味で、私からは、会員諸兄に対し、ただただ深謝の意を表する次第である。

ここに述べ切れなかった「この会」への想いは、次号(最終号)に譲りたい、と思う。

「会報・第一巻」は通研図書館等に寄贈するとともに国立国会図書館にも寄贈し、後者からはそれに対する御礼の文書も送られてきた。「会報・第二巻」までに多少時間がある。自分史の一端を、少しでも多くの方々が「会報最終号」に寄せて頂ければ、と願っている。

## 2. 会報 第 12 号 にお寄せ戴いた 感想文

(1) 小野 雅敏 様より 2008.10.16

坪井孝光 様  
C.C.今井先生

大変充実した会報第 12 号をじっくりと読ませていただきました。

特集の「佐藤秀吉さんを偲んで」は、在りし日の佐藤様を彷彿とさせるものとして、佐藤様に縁のある人々に繰り返し読まれるものと思います。

研究人生の最初に今井先生と佐藤様に大変お世話になった私としては、改めて存じ上げなかったご業績やお人柄を知ることができ、追悼の思いを更に深めるものとなりました。執筆くださった方々に感謝いたします。

追悼文の原稿が間に合わなかった者として、感慨の一端をここで述べさせていたきたいと思います。

何より、今井先生の慈愛のこもった文章、高井さん、鈴木さんの追悼文からは、佐藤様の暖かい人柄と優れた能力のほんの一部しか、私が知らなかったことが良く分かりました。

また、池田博昌氏と佐藤さんが同期入所であったことを初めて知り、驚いております。それは、池田氏とは前職の IPA におりました頃に大変お世話になり、賀状を交換する間柄ということもあります。これもまた、今井先生の豊かな人脈の恩恵のひとつだと思います。池田氏の記述からは、卒研生として指導を受けた当時の佐藤さんの年齢、境遇、そして研究への真摯な思いが偲ばれて、感慨がひとしおでした。

あれから既に 44 年が過ぎましたが、黒髪豊かな色白の風貌とすらっとした体躯で「小野君、キャッチボールをしよう」と呼びかけてくださったこと、「WKB 理論は難しくはないけど、君に分かるのはここまでかな」とか、卒論の仕上げに手間取っていた時には懇切に教えてくださりながら「ここまで手伝わせるのかい」と苦笑しながら言われた佐藤さんのお声を折に触れてありありと思い出します。

佐藤様、本当にありがとうございました。

小野澤さんの写研でのご業績の記事は、その分野の本道を切り拓いた人の情熱と自負を思わせるもので何度か読み返しました。実に立派な仕事をされた后感嘆いたしております。

また、「同窓」の皆様の新況やお仕事の記事はいずれも興味深く読ませていただきました。

最後に、会誌編集、作成に当たられた坪井先輩と今井先生に深く感謝いたします。

P.S.

私の研究所は 3 月に川崎からつくば市に移転し、職住近接の生活となりました。

個人:[ono.masatoshi@nifty.com](mailto:ono.masatoshi@nifty.com)、[mattono1941@gmail.com](mailto:mattono1941@gmail.com)

職場: 船井電機新応用技術研究所

305-0047 茨城県つくば市千現 2-1-6 つくば研究支援センター A-37

電話: 029-886-6500、FAX: 029-886-6511

職場: [ono.m@funai-atrri.co.jp](mailto:ono.m@funai-atrri.co.jp)

研究所も発足 5 年目を向かえ、ようやく成果の外部発表の段階に入りました。

もし、ご興味がおありでしたら、次の電子記事をご覧下されば幸いです。

[http://net.eetimes.jp/?4\\_91418\\_11954\\_7](http://net.eetimes.jp/?4_91418_11954_7)

## (2) 黒田 裕允 様より 2008.12.18

坪井様

会社をかわりました(転職)ので、メールアドレスをさがすのに手間取りました。今井哲二卒研の文集、第12号を読ませていただきました。いつもながら素晴らしい内容で感激しております。

今年はノーベル賞で日本人が4人表彰され日本中が沸き立ちました。日本の底力は理系の人脈の広さからできていることはいうまでもありませんが、ノーベル賞では基礎研究の成果が問われています。しかし、反面現実には理系の方々が実業界にどう貢献されたかがもっとわかりやすいと思います。そのことが、文集を拝読していて痛感します。

私は文系にすすみましたが、親父は電気の技術者でしたので、かなりの遺伝子が私の体にながれており、文集を読んでいますと多々感じる場所があります。科学にはうそがないということです。今でも道を間違えたかなと後悔することもあり、本田宗一郎さん、井深さんの生き方には強くひきつけられています。

坪井さんの長崎駐在時代のイセエビの研究(?)を思いだしながら、最近では海釣りをしています。先週 タイ湾でしとめた魚(名前は不明ですが、タイでは有名です)86cm、8.5kgで刺身にして、7人の釣り仲間と楽しみました。

黒田

Kuroda Hiromitsu

Smile Container Industry Co.,Ltd.

+662-902-3641

mobile: 089-784-8850

Mail address: [kuroda@smilegrp.com](mailto:kuroda@smilegrp.com)

